

## コロナ禍からみえた競技スポーツ環境の課題：私論

北村 哲<sup>1)</sup>

### An Essay: Task of coaching in the competitive sports world identified from COVID-19

Tetsu KITAMURA

Key words : controlling coach strategies & behavior, spontaneity of players, optimum sports carrier

キーワード：指導者の制御戦略・行動，プレーヤーの自発性，最適なスポーツキャリア

#### 1. はじめに

##### 1.1. 新型コロナウイルス感染拡大の青少年スポーツへの影響

2020年の新型コロナウイルス感染拡大により、東京オリンピック競技会の延期にとどまらず、スポーツ界に多大な影響を与えたことは周知である。このコロナ禍における日本政府の出した緊急事態宣言の解除後、スポーツ活動も徐々に再開され、夏季には各種スポーツ競技において大会も開催されるようになった。そのような中での陸上競技の大会では、中高生を中心に続々と新記録が更新された。この現象について、元400m ハードルのアスリートであり、現在幅広い分野でコメンテーターとしても活躍している為末氏は、インターネットに寄稿した記事の中で、練習抑制、全国規模の大会の中止の2つの要因を挙げている。前者については、普段から「やりすぎて、もうやりたくない」といった燃え尽き感を抱いていた選手等に代表されるように、日本の部活動を中心としたスポーツ活動においては、練習過多の状況が多く見られ、このような状況下にあった選手においては、練習時間が制限されたことで（練習抑制）、選手たちが「競技をしたくてしょうがない」という

状況を作れたのではないかということである。また、後者の全国規模の大会の開催が中止となったことについては、全国大会のメリットについて、子供たちに目標が生まれ努力する喜びが得られることであるものの、デメリットは指導が過熱し、子供たちが強い重圧にさらされてしまうことを指摘しており、これを受けて全国高校総合体育大会（インターハイ）や全国中学校体育大会などの中止について考えた際に、大きな目標が消えたことで、選手たちが「競技を楽しんで全力でプレーすればいい」という心境になったことが、良い結果が生まれた理由の一つではないかと述べている。

##### 1.2. 問題提起

前述の為末（2020）の記事を受け、なぜ練習抑制や全国大会の中止がパフォーマンス向上につながるようなスポーツ環境となっているのか？という問いを設定した際、元来は望んでプレーしていたものが、何らかの理由から自発的な活動ではなくなっている、つまり自発的活動が制限されていることが大きな要因として挙げられるのではないかと考える。これを挙げる理由は、近年の学生アスリートにおいて、自発的な競技目的ならびに目標を

---

1) スポーツ学部

持たないプレーヤーが増加しているのではないか、という著者の疑念から発生しているものでもある。

伊藤（2019）は、コーチングの目的を、プレーヤーの有能さを向上させていくことの支援、および人間的成長の支援であるとし、コーチは、プレーヤーが自己決定した行動がとれるように促すこと、簡単に言えば主体的に取り組めるよう行動することが重要であると述べている。しかしながら、前述で示した著者の疑念にもあるように、実際にはそのようなアスリートは数多く育っているわけではなく、今も昔もその総数は変わっていないと考える。つまり、指導者のあり方については議論されるようになったものの、現場レベルでは、まだまだ自発性・主体性を持ったアスリートを数多く育成できているとは言えないのではないだろうか。

### 1.3. 本稿の議論内容

本稿では、前述の問題提起である「自発的なスポーツ活動を制御する要因」について、数多く想起されるものの中から、（1）大会結果を重視する風潮からくる指導者の制御行動と、（2）多くの青少年スポーツ実施者のスポーツキャリアの形成の仕方、つまり長期的なスポーツキャリアの積み重ね方（子供の頃からのスポーツ経験：スポーツキャリア）を取り上げ、著者の指導者としての経験、スポーツまたコーチング領域の教育者としての経験、そして、学術的知見と最新の指導テキストの内容、ならびに新聞やインターネットの記事を織り交ぜながら考察し、更なる問題提起や意見の整理をしたい。

## 2. 大会主義と指導者の制御行動

### 2.1. 全国大会は必要か？部活の過熱と指導者の制御行動

今も昔も高校野球の全国大会である甲子園の人気は絶大である。また、同様に高校生の全国大会での活躍やその大会自体への出場

は、社会的評価も高いと考える。メディアの取り上げ方の影響を受け、高校生アスリートとその指導者は学校の広告塔としての機能を求められ、純粋にスポーツを楽しむことはできていないと考える。また、野球をはじめ多くのスポーツ種目において、高校や大学の運動部活動がプロスポーツ・実業団といった国内ハイパフォーマンスアスリートの育成の場を担ってきた文脈もあり（村木、1995）、指導者や学校は、そのようなスポーツによる社会的認知の向上・維持のために、学業以上にスポーツ活動を重視する場合も見られる。

このような現状から、スポーツに力を入れる学校や大学は増加の一途を辿っている。スポーツに力を入れる学校が増えるということは、本来ならば素晴らしいアスリートが増えることにつながるはずであるが、現状そうではない。素晴らしいアスリートの定義をパフォーマンスに優れるだけでなく、純粋にスポーツを楽しむ力を持ちながら、主体的に成長を求めている者とすれば、自身の意思とは別の流れの中、スポーツ継続をしている者は多いと考える。伊藤・富永（2016）は、某体育系学部の学生アスリート324名への調査から、「質の高いコーチングの実現」を求めているアスリートが多いことを報告している。このカテゴリー内での1/3を占めた内容は、「コーチがアスリートの意見を取り入れようとせず、コーチの考えをアスリートに押し付けようとすることでモチベーションの低下を引き起こしている」「コーチが自分の考えに固執し、アスリートを脅迫的振る舞いや言動等によって制御しようとしており、その結果アスリートのやる気を奪い取ってしまっている」「理不尽な指導が行われている」「コーチの機嫌を伺いながら練習をしている」など、「コーチの制御戦略」に関してであった。また、同調査では、「チーム文化の改善」というカテゴリも見出されている。その具体的な内容は、「部の明示的・暗黙的規則」「先輩と後輩との関係性」「OB・OGとの関係性」等により、

練習よりもそのルールに意識が取られ、効果的な練習ができていないという指摘であったことを報告している（伊藤・富永，2019）。指導者に認められること、活躍できるチームを維持することは、各アスリートの成功、また進学やその後の活動にも影響を及ぼすことから、その制限の中で活動せざるを得ない状況に置かれた青少年アスリートは多いことが予想されるだけでなく、多くのアスリートが、指導者やチームから制御されている実態が伺える。そのような時間が長くなればなるほど、また、格別の成功体験や有能感を獲得できなければ主体性は失われていくことも容易に予想できる。

一方で、著者は、本学のコーチングに関する講義において、「どのような指導が理想か？」という問いを学生らに投げかける。この問いに対しての学生らの回答記述では、「アメとムチをうまく使うことが重要」といったコメントが非常に多い。コーチングにおいては、「アメとムチ」はいずれも外発的動機によってプレーヤーを制御することであるので（伊藤，2019）、できれば内発的な動機のもと主体的に取り組めるよう関与するといった望ましい形からは遠いものである。Bartholomew et al.(2009)は、避けるべきコーチング行動について、次の制御行動を挙げている。（１）有形の報酬、（２）制御的なフィードバック、（３）過度な個人制御、（４）脅迫的な振る舞い、（５）自我関与の促進、（６）条件付きの関心。それぞれについての詳細な解説はここでは記述しないが（Reference Book pp.10-13. 参照のこと）、（１）有形な報酬について、努力することと交換条件になるような報酬は避けた方が良くとされる。全国大会に出場や優勝・入賞することで得られる社会的名誉等の「成績」というものを目指させることも報酬と同様であり、また、これは（５）自我関与の促進ともなる（結果が全て、勝利にしか興味がないという価値観の形成）。これは、よりスポーツの楽しさを深め

ること、自身で達成感や有能感を高めることを制御してしまう行動となることが考えられる。（２）制御的なフィードバックと（３）過度な個人制御は、プレーヤーの思考や行動をコーチの意図する方向に強制的に導くような形で与えられることを意味する。それは、プレーヤーが自ら考え行動する機会を奪うことになる。勝利のためのパフォーマンス向上の道のりや模範的な社会規範や人間性の獲得といった教育活動においては、指導者それぞれの中に、理想的な道のりや教育のあり方の考えが存在していることと想像するが、それがいくら正しくとも、その道のりや教育に収まるように制御することは、プレーヤーの自律的行動を奪うことにつながってしまう。制御ではなく、プレーヤーが最良の決定をできるよう促すためには、指導者が教える立場として上に立つのではなく、プレーヤー目線のもと、お互いに理解し合うことが重要であるだろう。その他、このプレーヤーの自律を支援するためのコーチング行動は、以下の７つが挙げられる。

【プレーヤーの自律を支援する行動（Mageau & Vallerand, 2003）】

- （１）ルール、制限の中で選択肢を与える
- （２）課題や制限についての根拠を提示する
- （３）他の人の感情や観点を認める
- （４）プレーヤーが主体的かつ自主的に行動する機会を与える
- （５）選択肢のないフィードバックを避ける
- （６）制御する行動を避ける
  - ・あからさまな制御を避ける
  - ・非難や制御するような発言を避ける
  - ・魅力的な課題に対して報酬を与えない
- （７）プレーヤーの自我関与を防ぐ

## 2.2. スポーツ活動の主たる目的として“社会性の教育”は必要か？

中学校や高校といった青少年における学校

内での競技活動について、基本的に学業とは無関係に競技力向上に熱心な指導者の存在と共に、トレーニング量と試合数の増大は著しく、それらのトレーニング量（時間）が高校時代すでに全スポーツキャリアを通じた最大値を記録する場合も少なくない（村木、1995）。高校までの過度に大会を重視した競技性の高いスポーツ活動においては、そのような活動をしている高校生アスリートが多いことも予想できる。中学3年間、高校3年間という短い期間で勝てるように引き上げる学校単位での競技活動は、指導者の制御戦略・行動の塊であり、多くの運動・スポーツ嫌い、精神的・肉体的不利益を被ったプレーヤーを育てている原因となっているとも考える。また、恣意的なパフォーマンス向上に向けたトレーニング事項に納得できないプレーヤーや、それについていけないプレーヤーに対しては、人間性の教育としてチームの枠から出ないようにしていくことも、先の運動・スポーツ嫌いや精神的・肉体的不利益につながると考える。本来、課外活動として、学校内の教育的活動であるため、そもそも純粋に「スポーツを楽しむ」ことや「パフォーマンスの向上」を提供する必要がなく、社会的スキルやライフスキルを獲得する場として扱われているチームも多いと考えられ、学校運動部活動は多様なポリシーのもと成り立っていることが伺える。高校期を終えて、スポーツ離脱する者は、「部活動をやり切った」という感覚を持っているように思える。それは、一つのスポーツ種目をやり切ったことは同意義ではないにもかかわらず、そのスポーツを「やり切った感」が形成されており、部活動（チーム活動、人間教育活動）に疲れてしまったことと、そのスポーツの競技活動が同一のものとして受け止められているのではないだろうか。スポーツに対して歪んだ、また、誤った認識を形成してしまうほど、部活動という活動は、制御的な戦略・行動が多いように考える。著者としては、スポーツ活動を通して本

質的な人間性を高めることは重要であるものの、日本や各地域、また所属グループにおける社会性といった部分は、スポーツ活動とは別のものとして、指導・教育していくことが重要であると考ええる。そのような社会的教育内容に触れる場合は、「これはスポーツと別な話で…」と、前置きをするべきである。また、スポーツのプレー場面においてのプレーの失敗等の評価・指摘の際に、「君は、普段から…だから…」などプレーヤーの人格や毎日の振る舞いとプレーを同一視しながら指摘することも、スポーツと教育活動が同一化していく要因となると考える。また、それはプレーヤーの人格否定にもつながり、プレーヤー自身による成長を止めてしまうものであると考ええる。

ハイパフォーマンスアスリートの中には、確かに普段の生活においても規律正しく、模範的なアスリートは存在するが、それはプレーヤー自らの気づきによってもたらされたものであって、他者に形成されるものでもなく、スポーツの本質的な価値でもないと考ええる。それは、一部の者が副産物的に獲得するものであり、多くの模範的に映るアスリートの社会性は、プロ活動の中でのスポンサー対応やメディア対応、多くの支援者との関わりといった、スポーツ活動とは別のところで獲得したものではないだろうか。これらの社会的教育はスポーツ指導者によってなされるべき部分は大きいですが、スポーツ活動の範囲を大きく捉えず、スポーツとは区別して指導することで、プレーヤーへの圧迫感や受け身な姿勢の助長を少なくできるのではないだろうか。

しかしながら、部活動が、教師がスポーツ活動や身体活動を通して、学習者に社会性や道徳性が形成されるように意図的に働きかける営みである活動である体育的活動（友添、2008）である場合は、同一的視点にならざるを得ないのは当然である。体育的活動の負の部分については、授業科目における「体育嫌



い」もあり、前述の勘違いとしての「スポーツ嫌い」を生み出していることなども考慮すると、価値観の多様化を求める社会の中では、「体育」のように多くのことを全体的に教育することの難しさが露呈してきているとも考えられる。どのように青少年がスポーツを認知していくことが最良か、社会や指導者は、改めてスポーツ観を形成することが求められているのではないだろうか。

### 2.3. 全国大会よりも実りある大会形式を

欧米においては、年代やスポーツ種目にもよるが、全国大会を実施していない国も多い(高木, 2020)。これにより救われる青少年アスリートの数も多く、またスポーツ継続者を数多く生み出す要因であるとも考える。大会は日頃の活動に目標を与え、その目標により有意義な時間と過程の獲得につながることから欠かせないものである。多くの意見者がすでに同様の提案をしているが、全国大会に拘らず、地域大会に時間をかけること、つまりトーナメント形式からリーグ形式へ移行し、パフォーマンスレベルならびに志向形態別のリーグ形式大会の開催により、プレーヤーの主体的なトライ&エラーを継続的に実施できるような環境を整えることの方が、情熱的なスポーツ愛好家や魅力あるアスリートの育成につながるのではないだろうか。

## 3. 計画されたスポーツ活動の良し悪し

### 3.1. 低学年期におけるスポーツ活動について

現在の少年のスポーツ活動の状況を概観すると、多くの子供達がスポーツ教室やスポーツスクール、スポーツ少年団等に参加し、各種スポーツ種目に取り組み始める様子は、以前と変わらないようである。著者がN市との連携事業で実施している小学3・4年生の運動能力向上教室に参加している生徒の40名の内、32名が前述のような形でスポーツ活動を実施しており、その中でも12名が複数スポー

ツに取り組んでいた。競技力向上を掲げたスポーツ活動における長期的視点での一貫指導・育成においては、神経系が飛躍的に発達する低年齢期においては、マルチにスポーツに取り組むことが推奨されており、早期専門化による幅広い運動能力の未発達を防ぐことが叫ばれている。実際に、日本オリンピック委員会(2018)による、2016年のリオデジャネイロオリンピックおよび2010年・2012年・2014年・2016年の夏季および冬季ユースオリンピックに出場した選手への調査結果では、「6歳までに経験したスポーツ種目数」は、海外のオリンピック出場選手と比較すると有意に低く、課題となっている。(リオ五輪出場選手:  $1.6 \pm 1.3$  競技, ユース五輪出場選手:  $1.8 \pm 1.7$  競技)。

また、村瀬・落合(2007)は、子どもの遊びを取り巻く環境について調査し、(1)現代の子どもは親世代に比べて屋外で遊ばない傾向が強くなっていること、(2)山・海・川・広場や空き地での遊びが、外遊び・スポーツ遊びに親しむことへの強い促進要因となっていることなどを報告しているとともに、遊び場所の減少やテレビゲームなどの普及により、外遊び・スポーツ遊びは子ども同士の関わりの中では伝承されにくく、大人による関与の必要性があることを指摘している。

上記2つのことを踏まえて、議論したいことは、スポーツ活動に参加した者は、平均が2競技を下回ることから、単一種目の傾向が強くなり、多様な経験が少ない状況となっていること、また、遊びも含めて、スポーツに関わる子どもは、低年齢期からずっと大人に管理・計画された中で活動することが当たり前になっており、より経験値が単純化しやすい状況であるということである。村瀬・落合(2007)は、子どもの外遊びの場所について、広場や空き地での遊びの減少に伴い、創造的な遊びが少なくなっていることも指摘している。それは、外遊びの場所としては、自然のスペース、鬼ごっこ等の集団遊びやスポーツ

遊びを行うオープンスペース，大人達が目が届きやすい道のスペース，大人達から隠れて遊べるアジトスペース，廃屋・工事現場などのアナーキースペースなどに分類できる（仙田，2003）が，この中でも大人が目が届く公園にはない創造的・刺激的な要素を併せ持つアジトスペースやアナーキースペースでの遊びの減少は，創造的遊びの減少の促進要因であると指摘している（村瀬・落合，2007）。

学生期まで競技的にスポーツを継続している者は，幼少期から複数のスポーツに取り組んでいるものはまだまだ多くはなく，また，そのスポーツ活動への参加は，むしろ大人の介入による管理・計画された中での活動時間の増加につながっており，子どもの創造性はもちろん，自発的な対応能力が制限されていくことの始まりとなっているのではないかと言うことである。取り組むスポーツ種目の専門化が起きる小学校高学年，中学・高校生期においては，1日のほとんどが学業とスポーツ活動で占められ，幼少期以降には自由な環境が無くなっていくことを考えると，スポーツに取り組む者が，どのようにして本質的な創造性や自発性を獲得していくのか，熟慮する必要がある。

### 3.2. スポーツ技能の熟達に関する理論

スポーツの熟達化について，Ericsson et al.(1993)は「Deliberate Practice(デリバレッ

トプラクティス)」を提案している。デリバレット・プラクティスとは，高度に組織化された練習のことであり，意図的・計画的な練習と言える。デリバレット・プラクティスを行うには努力が必要で，即座の報酬もなく，内在的な楽しみよりもむしろパフォーマンスを向上させるという目的によって動機付けされることが必要であるとされ（伊藤，2020），エリートアスリートとして大成するにはこのデリバレット・プラクティスによる練習時間を10年10,000時間以上蓄積することが重要であるとされている（中本，2011）。

一方，コート（1999）は，計画的練習理論に基づくスポーツ固有の発達モデルを提案し，先の意図的・計画的練習とは異なる「Deliberate Play（デリバレット・プレイ）」つまり意図的・計画的遊びを重要視している（中本，2011）。デリバレット・プレイとは，本質的に面白く，即座の喜びが得られ，楽しさを最大化させるようにデザインされた初期発育段階の身体活動である（伊藤，2020）。

前述のコート（1999）の計画的練習理論は，試み期（6から12歳），専門化期（13から15歳），投資期（16歳以上）の3つの発達段階に区分されているが，ウォールとコート（2007）は，試み期にデリバレット・プレイ（計画的練習）の量が増加しすぎると，青年・成人期にあたる専門化・投資期での競技のドロップアウトが生じやすい可能性を示していることから，

表1 自由遊び，計画的遊び，構造化された練習，計画的練習活動の違い（生涯スポーツの心理学（2011）p.117から抜粋）

次元	自由遊び (Free play)	計画的遊び (Deberate play)	構造化された練習 (Structuered practice)	計画的練習 (Deliberate practice)
活動の目的	楽しみ	楽しみ	パフォーマンス向上	パフォーマンス向上
活動中の視点	過程	過程	結果	結果
おとなによる観察	なし	大まかな観察	あり	注意深い観察
技能の修正	修正なし	即時の修正なし	発見学習による修正あり	即時の修正あり
満足感	即時的	即時的	即時的と遅滞	遅滞
楽しさ	内在	主に内在	主に外在	外在

発達早期の計画的練習への従事は、楽しさの経験を減少させ将来的なスポーツ参加を抑制するが、計画的遊びへの従事は、内発的動機付けや楽しさの経験につながり、結果として発達後期の計画的練習の継続を可能にするとされている（中本，2011）。図1は、コートほか（2007）によるスポーツ参加の発達モデルであり、図2は、スポーツ参加および熟達過程に関する国内の問題点をまとめたもので

ある（中村，2019）。

これらのモデルに共通していることは、低年齢期からの長時間にわたる練習と「プレイ」を伴わない練習の多さである。これらの要因は、オリンピックでのメダル獲得、プロ選手としての活躍、大学の推薦入試や奨学金制度のほか、日本の文化的問題（精神主義や一途主義）など多くの事項が複雑に絡み合った文脈の中で必要性が高まり発生していることが

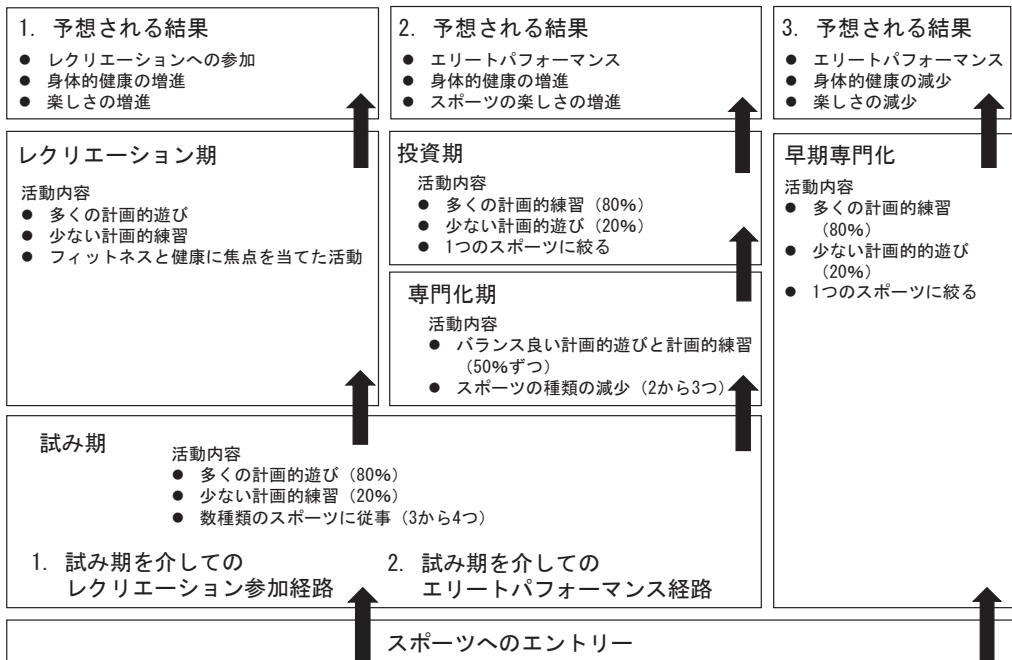


図1 スポーツの参加の発達モデル（生涯スポーツの心理学（2011）p.119より抜粋）

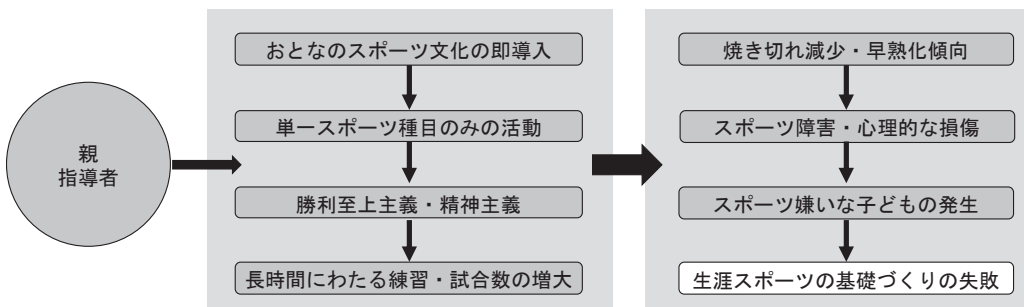


図2 ジュニア期のスポーツ指導に関する問題のモデル（公認ジュニアスポーツ指導員養成テキスト（2019）p.27より抜粋）

伺える。国内では根本的に「遊び」「楽しさ」の要素は少なく、構造的練習・計画的練習にあたる時間を数多く過ごすだけでなく、構造的・計画的といった部分においても、日本のスポーツ社会の風潮と指導者や保護者が捉える狭いスポーツ観・体育観（全国大会主義等がベースで、その後のスポーツキャリアの視点がない）の枠の中でのものとなり、プレーヤーにとっては洗脳的に制限された中での活動となる。自発性が育たないのは当然と言える。

日本スポーツ協会を始め、中央競技団体が唱える一貫した指導の重要性の理解と、個人個人に適した多様なスポーツ経験の積み重ね方について、社会的な理解がなされる必要がある。

### 3.3. 自発性を生み出す“時間”の必要性

国内では、前述のスポーツに限らず遊びにおいても自由な「プレイ」場面が減少している中、習い事としてスポーツ活動へ参加することは、計画的遊び・構造的練習・計画的練習にあたる時間を過ごすこととなり、スポーツ活動の主体であるプレーヤーが自発的に活動する機会はほとんど見られないこととなる。このような枠組みの中で、どのようにしてプレーヤーが自己決定の機会を多く作ることができるかが重要なポイントである。また、自発性を高めるポイントとしては、非公式学習の形をとる「Spontaneous practice（自発的プラクティス）」が重要となる。非公式学習とは、公式な教育機関やプログラムのカリキュラム外で起こる学習とされ（リビングストン、2002）、自発的プラクティスは、子どもたちが、大人が作成したカリキュラムや大人の言う最も大切なスキルを練習しなくても良く（系統的、教育学的な観点から計画されているものではなく）、ある状況のなかで散発的に発生する子どもたち自身によって行われる活動のことである（伊藤、2020）。スポーツ少年団やクラブ・スクール、部活動におい

て、このようないわゆる“大人の介入しない自由な自主練習”の時間をいかに自然発生的に提供できるかも、指導者としては重要なマネジメントとなる。また、その場に大人が姿を見せないこともポイントであると考えられる。ケガやけんかなどのリスクは考えられるが、長い目で見た場合に非常に効果的であることが想像できる。

著者の指導経験上、これらの要素を含んだ時間は、大学生期においても効果的な時間となると考える。国内の学生テニス競技では、指導者が頻繁に練習に参加しないチームが良いパフォーマンスを発揮する（この場合個人のパフォーマンスが向上するという意味ではない）ケースは稀ではない。テニスの場合、チームで練習する必要はなく、2人いれば練習が可能である。自分のペースで、自分なりにプレーしながら、満足感や達成感、虚無感を含んだ成功と失敗を重ねることで、自身の中に活気が戻り、目標が再設定される場合も多い。自身のスポーツ活動に対して肯定的な態度を獲得できることにつながっている。更なるパフォーマンス向上を望む場合には、指導者をパートナーとして扱えるだけのプレーヤーの自発性の確保は重要であることを考えると、指導者には、パフォーマンス向上の目的や意義を語りながら情熱的に指導すること以外にも、パフォーマンス向上に直結しない時間となるかもしれないが、そのために必要前提となる主体的な目標設定のためには、プレーヤーだけの自由な時間を提供することも必要である。

## 4. まとめ

本稿は、為末氏の記事を受け、自発的なスポーツ活動が実施されていないと感じられる昨今のスポーツ活動について議論してきた。解決策というものは見出せないものの、どのようなことが問題か、どのように指導者が考え、振るまい、指導行動をとるべきかについての一資料として整理した。



緊急事態宣言からの一定期間においては、コロナ禍が、プレーヤーの自発性を取り戻す機能を果たしたと考えるが、これを寄稿している12月段階においては、制限の中での工夫という点での新たなスポーツの仕方は見出されたものの、感染予防の観点における管理がさらに高まる結果、すでにスポーツ活動の主体が指導者へ移っているような感がある。一時見せたプレーヤーの自発性・主体性を確保し、豊かなスポーツキャリアを積み重ねられるよう、プレー環境をデザインする“大人”と“指導者”が変化していく必要があるのではないだろうか。

## 文献

- 緊急事態宣言からの一定期間においては、コロナ禍が、プレーヤーの自発性を取り戻す機能を果たしたと考えるが、これを寄稿している12月段階においては、制限の中での工夫という点での新たなスポーツの仕方は見出されたものの、感染予防の観点における管理がさらに高まる結果、すでにスポーツ活動の主体が指導者へ移っているような感がある。一時見せたプレーヤーの自発性・主体性を確保し、豊かなスポーツキャリアを積み重ねられるよう、プレー環境をデザインする“大人”と“指導者”が変化していく必要があるのではないだろうか。
- ### 文献
- Bartholomew, K. J., et al (2009) A review of controlling motivational strategies from a self-determination theory perspective: implications for sports coaches. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 2 : 215-233.
- Côté, J., et al (2009) An Integrative Definition of Coaching Effectiveness and Expertise. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 4 : 307-323.
- Côté, J., Baker, J., & Abernethy, B. (2007) Practice and play in the development of sport exercise. In G. Tenenbaum, R. C. Eklund (Eds.), *Handbook of sport psychology* 3rd ed. John Wiley & Sons; pp.184-202.
- Ericsson, K. A., Krampe, R. t., & Tesch-Römer, C. (1993) The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100, 363-406.
- 伊藤雅充 (2020) 子ども期のプレイとプラクティス。アスリートセンタードコーチング, <https://www.nssu-coaching.com/post/子ども期のプレイとプラクティス> (最終アクセス日 2020年12月10日)。
- 伊藤雅充 (2019) コーチングを理解しよう。Reference Book, 公益財団法人日本スポーツ協会; pp. 2-21.
- 伊藤雅充・富永梨紗子 (2016) 学生アスリートのデリバレット・プラクティス阻害要因。運動とスポーツの科学, 22 (1) : 59-65.
- Mageau, G. A., et al (2003) The coach-athlete relationship: a motivational model. *J Sports Sci*, 21: 883-904.
- 村木征人 (1995) スポーツ・チームの組織形態とコーチの役割: 日本の大学運動部における諸問題に関連して。筑波大学運動学研究, 11 : 29-43.
- 村瀬浩二・落合優 (2007) 子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因: 世代間を比較して。体育学研究, 52 : 187-200.
- 中村和彦 (2019) ジュニア期のスポーツの考え方。公認ジュニアスポーツ指導員養成テキスト, 公益財団法人日本スポーツ協会; pp. 27-30.
- 中本浩揮 (2011) 青年・成人期の運動発達の特徴とスポーツ技能の熟達。杉原隆 (編著), 生涯スポーツの心理学, 福村出版: 東京; pp.108-120.
- 日本オリンピック委員会 (2018) 「トップアスリート育成のための追跡調査」報告書第5報。公益財団法人日本オリンピック委員会; p. 34.
- 高木遊 (2020) 甲子園の真逆をやるべき? アメリカから見た日本スポーツの育成の問題点「10点差で勝ったら怒られる」。Sports Graphic Number Web, <https://number.bunshun.jp/articles/-/846156?page=2> (最終アクセス日 2020年12月10日)。
- 友添秀則 (2008) 体育における人間形成に関する研究。早稲田大学大学院人間科学研究科博士 (人間科学) 学位論文。
- 図子浩二 (2014) コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容。コーチング学研究, 27 (2) : 149-161.